

第3節 千人塚古墳石室奥壁の刻文について

井上 卓哉

はじめに

須津川東側の河岸段丘上および東側丘陵の斜面一帯には、須津（神谷）古墳群として120基を越える後期古墳が確認されており^(註1)、なかでも千人塚古墳は、その規模から「神谷群の主をなすもの」と考えられてきた^(註2)。

さらに、千人塚古墳の石室奥壁には、「本師釋迦如来・阿弥陀如来・大日如来・薬師如来・多寶如来」の仏名が刻まれていることが確認され、『吉原市の古墳』(昭和33年)や『富士市の埋蔵文化財(古墳編)』(昭和62年)において報告されているものの、「明らかに後世のものである」として^(註3)、詳細な検討はおこなわれてこなかった。

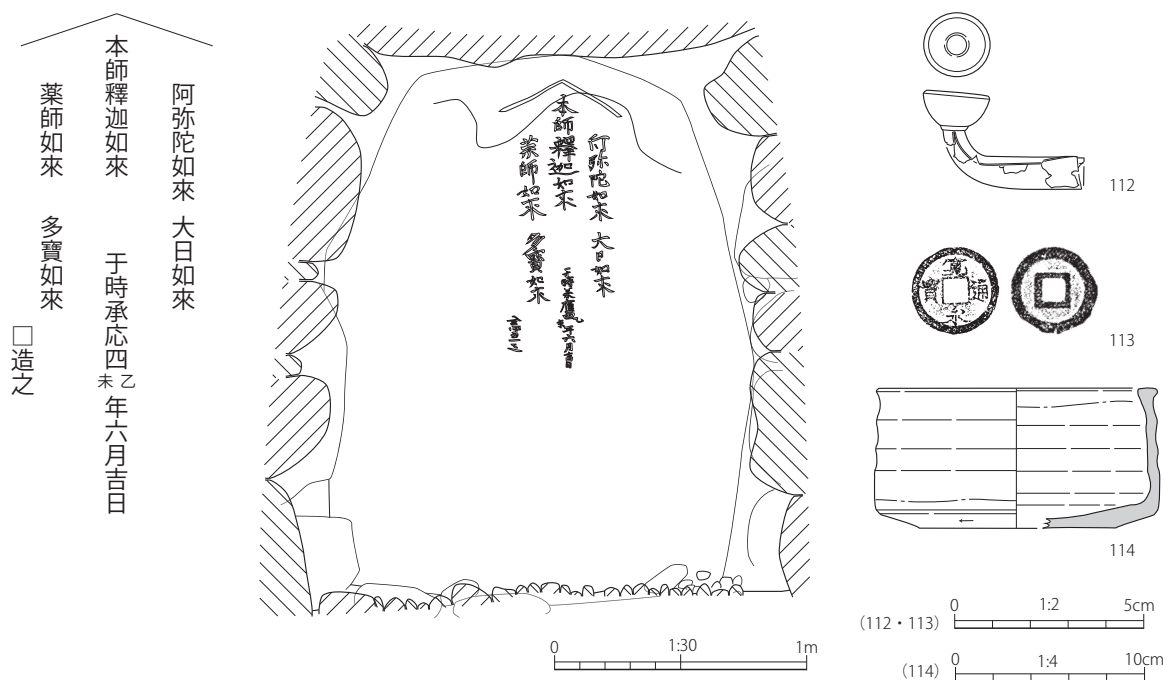
しかしながら、千人塚古墳の保存整備事業に伴い平成14年(2002)に実施された調査のなかで、既知の仏名だけではない情報も確認されたことに加え、近年では横穴式石室の転用例としても取り上げられていることから^(註4)、本稿ではその制作意図や制作者について若干の検討をおこないたい。

1 石室奥壁の刻文と制作意図

千人塚古墳の石室奥壁には、第110図に示したように、一枚石の上部に刻まれた「八」型の下に仏名と紀年銘として「本師釋迦如来 于時承応四乙未年六月吉日」、向かって右側に仏名として「阿弥陀如来 大日如来」、向かって左側に仏名として「薬師如来 多寶如来」の仏名、さらに判読が困難ではあるものの、多寶如来の左下に、願主あるいは施主を意味すると思われる「[] 造之」という刻文を確認することができる。

この刻文からは、江戸時代初期の承応4年(1655)に、釈迦如来を本尊とし、阿弥陀如来・大日如来・薬師如来・多寶如来を脇侍とする何らかの宗教行為がおこなわれていた状況が伺える。

これらの仏名が選択された背景として、中岡敬善氏は、富士山頂上の火口及び、火口を取り囲むように存在する8つの峰(八峰)にあてはめられた9体の仏、つまり近世において富士山に存在すると考えられた仏と共通するものが認められることから、近



第110図 千人塚古墳 奥壁刻文と関連遺物

世の富士山信仰に関係して制作されたものではないかと指摘している^(註5)。そこで、ここでは、中岡氏の指摘も踏まえながら、あらためて富士山信仰との関わりについて検討してみたい。

近世において富士山に存在すると考えられていた仏であるが、固定化されていたわけではなく、時期や信仰主体により差異が見られる。

例えば、延宝8年(1680)に吉田口で制作された『八葉九尊図』では、大日如来・阿弥陀如来・文殊菩薩・釈迦如来・普賢菩薩・薬師如来・観音菩薩・勢至菩薩・地藏菩薩が挙げられている。このうち、如来は4体であるが、すべてが承応4年(1655)の千人塚古墳の石室奥壁に刻まれていることがわかる。

いっぽう、享保18年(1733)に大宮・村山口登山道を用いて山頂に至った中谷顧山の『富士筆記』(西尾市岩瀬文庫蔵)では、8つの峰を地藏嶽・阿弥陀嶽・観音嶽・薬師嶽・大日嶽・浅間ヶ嶽・剣ヶ峰・雷之嶽としている。そこから比定される如来としては、阿弥陀如来・薬師如来・大日如来の3体であるが、いずれも千人塚古墳の石室奥壁に刻まれたものと一致している。

さらに、上限が宝暦8年(1758)、下限が天明年間(1781～1789)の発行と考えられる『富士山禅定図』(富士山かぐや姫ミュージアム蔵、第111・113図)では、地藏菩薩・阿弥陀如来・観音菩薩・釈迦如来・大日如来・弥勒菩薩・薬師如来・文殊菩薩・宝生如来が挙げられている。このうち、如来は5体であるが、宝生如来を多宝如来と同一と考えると、全てが千人塚古墳の石室奥壁に刻まれたものと一致する。

最後に、断絶していた時期があるものの、元禄期から幕末まで活動した富士山南麓の村山修験の山伏、大宝院が制作し、明治時代以降に大宝院を継承した秋山家に伝来した摺物『八葉九尊図』(富士山かぐや姫ミュージアム寄託、第112図)には、富士山に存在する仏として、大日如来・薬師如来・阿弥陀如来・千手観音・十一面観音・勢至菩薩・毘沙門天・文殊菩薩・不動明王の姿が描かれている。このうち、如来は3体であるが、いずれも千人塚古墳の石室奥壁に刻まれたものである。

このように、千人塚古墳に刻まれた仏のうち、阿弥陀如来・薬師如来・大日如来は富士山の仏につい

て取り上げた資料に登場するものであり、釈迦如来・多宝如来についても、確認することができる資料が存在していることが明らかとなった。千人塚古墳の奥壁になぜ菩薩などの仏の名が刻まれていないのかという課題はあるものの、近世の富士山信仰と何らかの関係があったうえで刻まれたものと考えerことは可能であろう^(註6)。

2 石室奥壁刻文の制作者

前節では、千人塚古墳の石室奥壁の刻文について、富士山信仰に関係したものである可能性を指摘した。では、こういった性格の人物が制作に携わったのだろうか。

残念ながら、願主あるいは施主の名前を刻んだと思われる部分については判読ができないため、詳細については不明である。ただし、前述の中岡氏は、像容あるいは種子を刻んでいないことから、近世の富士講との関係を指摘している。

この近世の富士講について考える場合、戦国時代から江戸時代初期にかけての時期に富士山西麓の人穴の地で修行したとされる長谷川角行にルーツを持ち、江戸を中心に流行した富士講と、富士山南麓の村山の地を拠点とした村山修験の山伏達の活動に起因する富士講とを区別する必要がある。

このうち、江戸を中心とする富士講の活動が活発になるのは富士講の指導者であった食行身禄が、享保18年(1733)に現在の吉田口八合目の鳥帽子岩で断食入定して以降のことである。つまり、承応4年(1655)という石室奥壁の紀年銘とは時代が一致していないということ、さらに、千人塚古墳周辺の地で、富士講が組織されていたとの記録が確認されていないことから、長谷川角行にルーツを持つ富士講に関わる人物が制作したということは考えにくい。

そこで、村山修験の山伏達の活動に関連するという可能性について考えてみたい。村山修験は、富士山南麓の村山の地に所在した富士山興法寺に所属していた修験者の一派であるが、中世後期までは、村山を含めた富士郡上方地域(現在の富士宮市)に加えて、富士郡の下方地域(現在の富士市のうち、富士川以東の地域)にまでその勢力が広がっていたと想定されている^(註7)。



第 111 図 富士山禅定図（部分）

【富士山かぐや姫ミュージアム蔵】



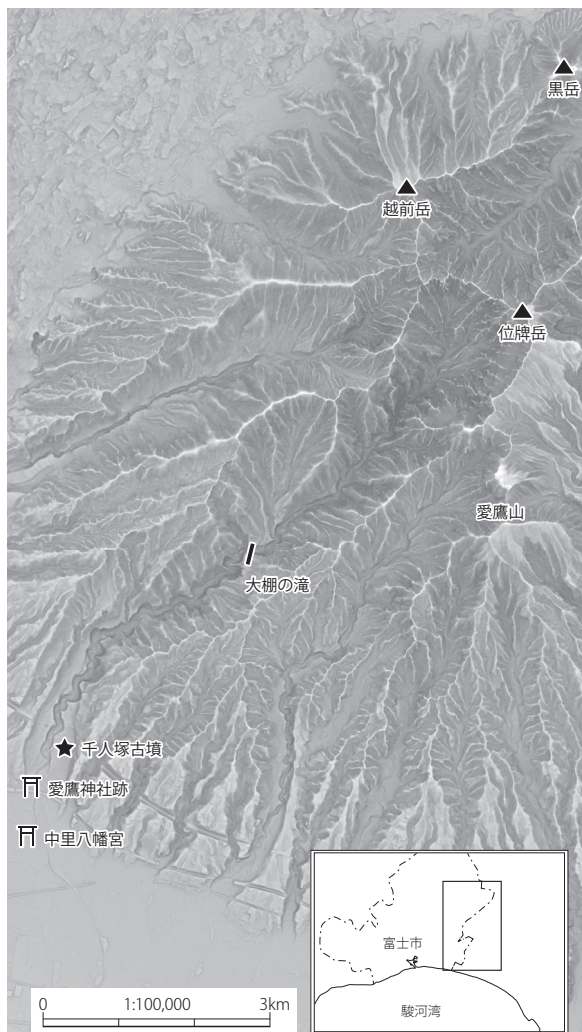
第 113 図 富士山禅定図

【富士山かぐや姫ミュージアム蔵】



第 112 図 八葉九尊図（大宝院秋山家資料）

【富士山かぐや姫ミュージアム寄託】



第 114 図 千人塚古墳と多門坊関連連史跡

赤色立体地図：国土交通省富士砂防事務所が取得した航空レーザ測量データ（平成 31 年度以前）から作成した 1m DEM および日本水路協会「海底地形デジタルデータ M7000 シリーズ (M7001Ver2.3 関東南部)」を使用。赤色立体地図は、この DEM をもとにアジア航測株式会社の赤色立体地図作成手法（特許 3670274、特許 4272146）を使用して、アジア航測株式会社・千葉達郎氏が作成した。以上のデータを、静岡県富士山世界遺産センター（小林 淳 教授）より本図作成のために提供頂いた。

また、村山修験の重要な修行の一つであり、約1ヶ月に渡り富士山中で実施される富士峯修行にも、中世後期の天正年間には、富士郡の根方地区や加島地区から山伏が参加していたことが明らかとなっている^(註8)。

こうした山伏の中に、当時、千人塚古墳から南に約1.3km離れた場所に所在する中里八幡宮の別当の地位にあった多門坊が含まれていた。多門坊は中里八幡宮の東側に別当屋敷を構えており、現在でも同地にお住まいの多門家に中世まで遡ることができる多門坊の資料群が遺されている。

これらの資料のうち今川義元の判物や徳川将軍家の朱印状により、多門坊は中里八幡宮周辺の支配を認められていたことが確認されている^(註9)。富士山での修行をおこなうとともに、在地の支配を認められていた多門坊は、いわゆる「里修験」として、山地での修行に加えて、周辺の庶民への布教活動にも携わっていたと考えられる。

さらに、多門坊は中世後期から中里八幡宮の別当に加えて、富士山信仰とも密接に関連している愛鷹神社（現在は中里八幡宮に合祀されている）の管理もおこなっていたことが確認されている^(註10)。

さて、この多門坊が別当を務めていた中里八幡宮西側の道は、須津川に沿って、合祀前の愛鷹神社、大棚の滝を経て越前岳を最高峰（標高1450m）とする愛鷹山連峰へと繋がっている。つまり、このエリアは、山伏としての多門坊の主要な活動範囲であったことが想像できる（第114図）。

こうした中で、千人塚古墳の石室が、多門坊第6代の頼翁（1617～1675）の代に、多門坊の修行の場（行場）として選択され、あるいは多門坊の檀家の人々が何らかの宗教的な活動をおこなう場所として選択され、多門坊に関わる人物によって奥壁に刻文が刻まれた可能性は十分に考えられるのではないだろうか。

おわりに

本稿では、千人塚古墳の石室奥壁に刻まれた刻文に関して、富士山信仰に関わるものである可能性と、その制作者として富士山での修行にも参加し、千人塚古墳周辺を活動エリアとしていた多門坊に係る人物が挙げられるのではないかとすることを指摘した。

残念ながら、多門坊による修行の状況や、千人塚古墳周辺の行場の状況を知ることができる資料は伝来しないことから、あくまで可能性の域を出ない検討である。しかしながら千人塚古墳から発見された遺物の中には、刻文が刻まれた時期とほぼ同時期とされる陶磁器製の香炉の破片が含まれている（第110図114）。

こうした資料と、他地域の山伏による行場で用いられた祭具や祭壇の状況とを比較することにより、千人塚古墳の石室の転用に関する具体的な状況を明らかにすることが可能になると考えられる。

謝辞

本稿執筆に際し、刻文の判読や資料提供について、阿部泰郎、阿部美香、大高康正、狭川真一、中岡敬善の各氏からご教示を賜った。末筆ながら、記して謝意を表する。

註

- 1 富士市教育委員会 1988『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』p107
- 2 吉原市教育委員会 1958『吉原市の古墳』p148
- 3 富士市教育委員会 1988『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』p107
- 4 中岡 敬善 2021「補稿 横穴式石室と横穴墓の転用に関する一考察 - 石仏と種字が彫られた関東・近畿地方の転用例について」『市民の古代研究【古代の風】第304号』
- 5 前掲註4
- 6 阿部泰郎氏、阿部美香氏からは、釈迦如来・薬師如来・阿弥陀如来という過去現在未来の三世仏と密教の大日如来、法華経の多宝如来という組み合わせから、もっとも初期の富士行者とのかかわりを示唆するものであるとの指摘をいただいた。
- 7 大高 康正 2013『富士山信仰と修験道』p304
- 8 前掲註6、p302
- 9 前掲註6、p305
- 10 前掲註6、p304